文化資料館調査研究報告(21)：81-90, 2012

「文化資料館と活動する会」の20年(1)

「文化資料館と活動する会」の誕生

平野　文明(*1)

はじめに

「文化資料館と活動する会」とはどのような会なのかをまず説明しておこう。たいへん大まかにいえば博物館友の会のような会といえるだろう。博物館の多くは「友の会」を組織している。ネットで検索すれば有名な大型博物館の友の会がいくつも現れる。しかし「大まかにいえば」と注釈を付けたように、そのような友の会との違いも大きい。友の会では、会員は館の入館料・図書室利用・印刷物・観察会や見学会や学習会への参加等々で恩恵が受けられるようになっているが、「文化資料館と活動する会」（以後「活動する会」あるいは「会」と略記）ではそのような恩恵はない。それならば活動する会は何を行っているのかというと、会の会則第2条、会の目的に「本会は茅ヶ崎市文化資料館と協力して、社会教育活動を行う事を目的とする。」とあり、第4条　会の活動には「（1）自然、民俗行事および考古の各部会を設けて、茅ヶ崎市文化資料館との共催活動を行う。（2）‐略‐」とある。つまり茅ヶ崎市文化資料館（以後「資料館」あるいは「館」と略記）の活動（事業）に協力しているのである。いい方を変えれば、館と協働して社会教育活動を行っているのである。活動する会の会員は、資料館から恩恵を受けるのではなく、館と一緒に社会教育活動の一端を実施しているのである。活動の具体例は後々述べることにするが、なぜこのようなことになっているのかは、会の誕生のいきさつをたどれば分かってくる。

茅ヶ崎市文化資料館は昭和46年（1971）7月1日に開館した市教育委員会所管の博物館類似施設である。条例によって「文化的又は自然誌的郷土の資料を調査し、収集し、研究し、保管し、及び展示することにより市民の郷土愛と郷土文化の向上を図る（以下略）」と定められている。開館当初は主に考古・民俗資料を扱っていたが、開発が進み自然の景観が急速に変わっていくことなどから自然誌系の標本やデータも対象にするようになった。

扱う「文化的または自然誌的郷土資料」は範囲が広く、少数の職員だけではとても対応しきれるものではなく、開館後間もなくから、館が行う調査・資料収集・資料整理などの事業にさまざまな形で市民の協力が寄せられていた。それは例えば市民が参加する資料整理作業であったり、市民と館が一緒に行う資料調査・資料採集であったり、館が行う催し物への市民の協力などであった。

そのような中で、資料館があることを知らない市民があまりにも多いのではないかということが、館に協力する市民の中でささやかれるようになり、館の職員も含めて、この状況を打破し、さらに多くの市民に知って貰うにはどうしたらよいかを模索することとなった。

元から資料館は、教育委員会社会教育課が文化財保護のための施設として運営管理していた。ここで明かしておくと、筆者は資料館の開館当初から平成5年（1993）3月31日までこの文化資料館に机を置い

て仕事をしていたのだが、同年4月からは社会教育課に席を移し、文化財保護という立場から館の運営に携わってきた。現在は公務として館の業務に関係することはないが、平成21年10月、「活動する会」が長年の活動を認められて、茅ヶ崎市表彰を受けたことを契機に、この会の経過をまとめておこうと思い立ったのである。この会の経過をたどることによって、行政と市民ボランティアとの関係や小規模博物館類似施設の抱える問題点などを考える糸口したいという思いもある。幸いなことに会の発足当時からの記録が会員などのところに丹念に保存されていた。今回、これらの記録を読み直すことによって記憶を呼び覚ますことができたところもあるが、思い違いなどについては大方のご指摘を願いたい。

文化資料館が開館して40年、「文化資料館と活動する会」ができて20年になる。紙上スペースの関係から、今回はまず会の発足時のことについてのべることにする。

資料館が知られていない。どうにかしなければ！

文化資料館を憂うる人たちの集会が催された。平成3年（1991）2月24日（日）13:30から、於文化資料館がそれであった。どのような声かけがなされたかは記録されていないが、19人の市民と、社会教育課から担当の係長と資料館から2名の職員が参加した。

会議録を読むと、今に継続している活動する会の方向性が、この24日と、二回目の集まりである3月10日の会議（後述）で、早くも決まったことがよく分かる。参加者から次のような発言がなされている。便宜上通し番号を振った。

1　資料館の利用が少ない。運営がなっていないのではないか。

2　利用者同士の横のつながりがほしい。そこで自分たちが行っていることを発表するような。資料館はそのための（結節点）、コミュニティーセンターとしての役割がはたせないか。

3　住民の知恵を発表するような場、機会が欲しい。

4　資料館にたくさんの図書が集めてあるが、利用しにくい。

5　資料館で企画する講座などを、会場を移して行ったらどうか。

6　資料館に運営委員会的な審議機関はあるのか？　→（資料館からの回答）無

7　特別展示はどのくらいの入館者があるのか？

8　資料館に関わっているサークルの数は？　→　昨年度（平成元年度）18団体

9　資料館の職員は自分の仕事の成果をもっと内外にＰＲしてもよい。

10　例えば八潮市では人口は当市の三分の一だが、最近立派な博物館を開館して、市の誇りとしている。茅ヶ崎も見習っても良い。

11　「利用者懇談会」的なものを作って、そこが主催する資料館企画事業を考えたらどうか。

12　学芸員、収蔵資料、資料館の建物、市民（利用者）がうまく結びついて、その結びつきを生かした企画を考えたい。

13　かつて資料館の特別展に関係したことがあるが、特別展の部屋がないために展示をすることは確かに大変だということを実感した。常設展示を止めてしまうような方法は考えられないか。（特別展示を常設展示にしてしまうとか。）

14　子どもたちに利用してもらうことが大切だ。そのためには学校に宣伝したほうが良い。

15　子どもたちに使って貰うことは大切だが、展示場のスペースその外の館の施設

上の問題もある。

16　利用者の交流では、交流の仕方が問題だ。公民館とはひと味違った交流集会が考えられないか。

17　遺跡の発掘作業に携わっていて、今でも大量の遺物を発掘している。しかしいつまでたっても展示場に並ばない。その間の整理作業の困難なことは十分承知しているが。

18　館の印刷物「資料館だより」などに新着図書などを紹介したらどうか。

19　資料館があることを知らない市民が実に多い。

20　新受入資料を早く展示場に並べたがよい。

21　自分の住んでいるところでは資料館があることを知っている人は実に少ない。もっとＰＲしてもらいたい。

22　市民を巻き込んで、イベントを企画したらどうか。

23　公民館とは違った資料館の使い方を考えたい。

24　市民対応をもっと細かく行ったらどうか。

25　資料館以外の場所への出張特別展示や講座を企画したら。

26　事業の企画に市民の手助けを借りたら。公民館とは違ったカラーであることが必要だ。

27　人材の発掘につとめた方がよい。たとえばどこかでドジョウ捕りの名人を紹介して表彰していたことを見たが。

28　資料館を紹介した記事を広報に欠かさず、それを駅などにも置いておいたらどうか。

29　横の連絡会のようなものを作ったほうがいいと思う。

この集まりの行われた平成3年（1991）は資料館が開館して20年を経過していた。この日参加された19人は、日頃から資料館と何らかの関わりのある人たちだったので資料館の現状と弱点をよく承知していたといえる。

29件の意見は、次の五つのグループに分けることができるように思う。

Ⅰ　利用者が少ない、もっとＰＲにつとめよという意見。　1・7・14・19・21・28

Ⅱ　新収集資料や新着図書を早く公開すべきという意見。　4・17・18・20

Ⅲ　建物による制約を知恵をもって乗り越えよという意見。　5・13・15・25

Ⅳ　利用者あるいはそのつながりを生かした事業展開を示唆する意見。この意見が活動する会の出発点になったと思われるので、重複するが今一度紹介しておこう。

2　利用者同士の横のつながりがほしい。そこで自分たちが行っていることを発表するような。資料館はそのための（結節点）、コミュニティーセンターとしての役割がはたせないか。　3　住民の知恵を発表するような場、機会が欲しい。　6　資料館に運営委員会的な審議機関はあるのか？→無。　8　資料館に関わっているサークルの数は？→昨年度18団体。　11　「利用者懇談会」的なものを作って、そこが主催する資料館企画事業を考えたらどうか。　12　学芸員、収蔵資料、資料館の建物、市民（利用者）がうまく結びついて、その結びつきを生かした企画を考えたい。16　利用者の交流では、交流の仕方が問題だ。公民館とはひと味違った交流集会が考えられないか。　22　市民を巻き込んで、イベントを企画したらどうか。　23　公民館とは違った資料館の使い方を考えたい。24　市民対応をもっと細かく行ったらどうか。　26　事業の企画に市民の手助けを借りたら。公民館とは違ったカラーであることが必要だ。　27　人材の発掘につとめた方がよい。たとえばどこかでドジョウ捕

りの名人を紹介して表彰していたことを見たが。 29 横の連絡会のようなものを作ったほうがいいと思う。

V その他の意見。9・10

これらの提案から、資料館をさらに良くしよう、そのためには自分たちも一肌脱いでもいいという意気込みが伺えるのである。「資料館の活性化だ」が合い言葉のようであったことが思い出される。

資料館の活性化だ！

半月ほどして第二回目の集まりがあった。同年3月10日（日）13:30から、於文化資料館がそれであった。参加する市民は14人、資料館から2人。

このとき資料館から、第一回集会の会議録（前記）が配布された。そして、29件の意見の中には実施に移せると思われる案がいくつかあるので、さらに検討し、平成3年度の当初から実行できるよう話を進めたいと提案された。これについて次のような意見が出された。

1 眠りっぱなしの資料が多いから、資料館収蔵資料の活用を考える。例えば3月ならひな人形を出してきて飾り、ひな祭りの勉強会を行うなど。

2 眠っている収蔵資料を利用したい。

3 遠くて利用しにくい学校がある。特に東海道以北の学校は利用しにくい。資料館を知らない人が多い。

4 小学校の3年生が地域の事を学ぶ。学校へ出張講師などをしたらどうか。

5 看板書きや道案内を書くことなら引き受ける。

6 講座というと大げさだが、市民の知恵の紹介、発表会を行いたい。例えばMUさんは貴重な体験を持っておられるので話をお願いして、みんなで伺うような機会を作りたい。そうして、そのようことを重ねることでみんなの横のつながりを持ちたい。

7 例えば日曜日などに資料館に常駐して、その時の入館者に向けて展示資料の中から自分の得意の分野の資料についてお話をし、解説などをしようと思ったこともある。

8 資料館をなるべく多くの市民に知らしめるためにお祭りのようなことをしたい。（祭の内容をどのように考えているかという質問があった）

9 ロッカーに眠っている図書の風入れならできる。

10 「録音奉仕会」に参加しているが、今NTTの茅ヶ崎の昔話の電話サービスを手伝っている。だから民俗資料館のいろりを使って、そのまわりで茅ヶ崎に伝わる昔話をナマで語り聞かせなどもできる。

11 この運動の組織を考えるなら、資料館の「友の会」はどうだろうか。多くの人が係わることができるようにするなら利用者懇談会（注 公民館に設置されている利用者の集まり）的な名前はよくない。グループ単位ではなく、個人で参加できるようにしたい。

12 全国の凧を集めた展示をしてみたい。

13 話題提供、講演会のようなことを行うのであれば、「茅ヶ崎自然に親しむ会」からも発表できる。

14 友の会を作るとすると、意見交換の場としての会でありたい。お知らせのような印刷物なども必要になるだろう。

15 大岡祭（現在は大岡越前祭）の折に何かできないだろうか。

16 「茅ヶ崎郷土会」では史跡めぐりを行っているから、これをここで討議されていることの趣旨で行なおうとするとどうなるのだろうか。

ここで資料館から、実施する日程を検討しようとの提案があったが論議は進まな

かった。しかしこの日の結論として次のような事柄が決まった。

①大岡祭の際に民俗資料館旧和田家住宅を会場にして、見学者相手の和田家住宅の説明、子ども向けの民話語り聞かせを行うこと。

②平成3年（1991）5月26日（日）午後、文化資料館を会場に、Iさんが「茅ヶ崎の磯の生物」について話すこと。

③茅ヶ崎自然に親しむ会が8月に子どもたち相手の宿題相談に対応すること。

④4月6日（土）に集まってさらに計画を深めること。

また、次のような意見が出された。

・スケジュールの実行については広報などを使ってＰＲにつとめる。

・この運動への参加を多くの個人、グループへ呼びかける。

・市民の努力を市役所内部へ周知すべく、会合へは社会教育課長の参加も求める。

・三ヶ月に一回くらい集まって意見交換を行いたい。

なお、この一回目と二回目の集会の様子は「資料館だより」№74（平成3年3月刊）に報告されている。

資料館活性化のための最初の催し

平成3年（1991）4月26日（金）から28日（日）の三日間、堤にある民俗資料館旧和田家住宅（江戸末期建築の古民家）を会場に最初の催しが行われた。大岡越前守忠相を出した大岡家の江戸時代の菩提寺、浄見寺が市内の堤にある。民俗資料館は浄見寺の隣にあるので、大岡祭の折に寺を訪れる人たちが多いことを考慮に入れて、この催しは企画された。いつもは管理人もいない古民家施設だが、これを活用して、ＰＲにつなげたいというのが目的だった。

郷土史や古典文学などを学習しているサークル「ピエーデ・クルーボ」「一樹会」「あしかび」と自然学習をしている「茅ヶ崎自然に親しむ会」、福祉ボランティアサークル「茅ヶ崎録音奉仕会」の有志による古民家の解説と茅ヶ崎に伝わる昔話、伝説の語り聞かせが行われた。『囲炉裏の煙に目を細めながら昔を懐かしむお年寄り、神妙に昔話を聞く小学生、建築の仕事をしているからといい、熱心に質問された方々など、どなたも満足して帰って行かれました。そして何よりも三日間がんばったボランティアの方々が「大変面白かった。またやりましょうよ」と行っておられた雰囲気が、この催しを成功に導いたようでした。』と「資料館だより」№75（3年6月刊）に報告されている。まだ活動する会は組織されていなかったが、記録には337人の市民が訪れたとある。

活性化活動いよいよ始まる

資料館の活性化活動は「得意とするところ、無理しなくてもやれることを、文化資料館を会場に実行しようというものです」と「資料館だより」№75に書かれている。そして平成3年度中に、市民がボランティアの講師をつとめる講演会が次のように催された。

3年5月26日（日）井川洋介さん「茅ヶ崎海岸の漂着物」参加者23人

7月7日（日）塩原富男さん「茅ヶ崎の記念碑」参加者数不明

9月7日（土）三橋卯之助さん「関東大震災の体験を語る」　市消防本部職員「地震対策の話」56人

11月30日（土）樋田豊宏さん「日本列島イチョウあれこれ」19人

平成4年（1992）1月18日（土）水沢好子さん「漆文化を語る」44人

井川さんは毎日犬の散歩をかねて海岸を散歩し、漂着物を集めておられた。貝殻、

海藻、外国の台所用品などを持ち込んでの話だった。塩原さんは3年3月に長年の市内の記念碑の調査結果を資料館叢書10『茅ヶ崎の記念碑』として出版されていたので、その中から特徴あるものを語られた。三橋さんは自分が被災した様子を描いた絵を30枚ほど並べて体験談を話された。消防本部職員にもお出まし願ったのは効果的だった。樋田さんは2年8月に全国の事例を含む『イチョウ』を出版されており、市内にあるオハツキイチョウをはじめ国内の巨木などについて話された。水沢さんは自作の作品などを並べて、趣味とする漆工芸の話をされた。これらの詳細は「資料館だより」№75・76・78に載っている。

「夏休み自然教室」もこの年から活性化活動として行われるようになった。「資料館だより」№76に「茅ヶ崎自然に親しむ会」会員の斎藤溢子さんが次のように報告しておられる。

『「茅ヶ崎自然に親しむ会」が夏休み自然教室を開いて今年で3年になります。今年は、資料館活性化活動の一つとして、児童生徒の夏休みが始まったばかりの7月28日（日）に行いました。

市の広報、資料館で作ったチラシ、それに口コミなどの事前の宣伝もあって、当日には、10時の開場を待ちきれない親子連れがまず見えました。入口に受付を置き、どの部門の話を聞きたいのかを確かめて、漂着物・海の生物コーナー、植物のコーナー、昆虫のコーナー、野鳥のコーナーに案内しました。社会科のコーナーも資料館の方で設けてありました。

参加者は、幼稚園の年長さんから小学生までで15名ありました。答える方の自然に親しむ会の会員は、質問に答えたり、標本の作りかたの説明をしたりしました。それに加えて、茅ヶ崎海岸の貝類のお土産や、外に出て捕虫網で蝶の捕りかたの実演まで交えて大盛況でした。つきそいで来ておられたお父さん、お母さんが子どもと一緒になって説明に聞き入っているのは微笑ましい光景でした。』

文化資料館で考古学や文化財の学習などを行っている「文化財を学習する会」というサークルが縄文土器などを造り、野焼きをして焼き上げる予定を立てていた。この取り組みを、活性化活動の一環として市民も参加見学できるような形で行うことになった。9月10日（火）から14日（土）まで資料館で土器づくりを行い、乾燥させて10月17日（木）に民俗資料館の駐車場で野焼きをし、土器を完成させた。第一級の体験学習だが、今は市内では焼成する場所を見つけることが困難だろう。

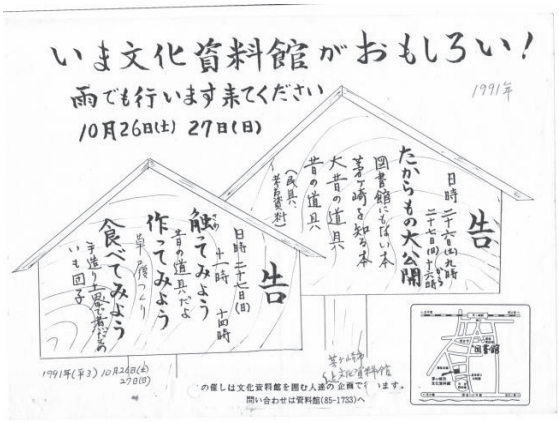
資料館の活性化のための四回目の話合いが3年7月13日（土）に開かれた。（三回目は4月6日に行われているが議事録がない。）

記録によると、冒頭、資料館から組織化を考える時期ではないだろうかという提案があったとある。

この日の主な議題は、仮称「資料館まつり」の実施についてだった。すでに公民館では「公民館まつり」を行っていたが、資料館にはなかった。資料館をＰＲするには「まつり」を行う事が効果的という考えからの提案で、提案者（市民）から、内容は、日の目を見ない図書や民具の風入れ（公開のこと）、手作り民具としてぞうりの製作販売、復元土器を使った煮物、茅ヶ崎の郷土食（いも団子やオバク＝大麦を煮てご飯のようにしたもの）を作って試食することなどが披露された。実施の時期・場所、予算をどうするかなどのが課題となり、市民9人＋資料館からなる「まつり世話人会」をつくって検討することになった。

そして4回の世話人会を経て、3年10月26日（土）、27日（日）に「資料館まつ

り　いま文化資料館がおもしろい」が行われた。次のようなチラシがＰＲのために作られた。



「資料館だより」№.77 に、お孫さんを連れて「まつり」に参加された方の文章があるので紹介しておこう。

『10 月 27 日の日曜日、今日の資料館はいつもとは雰囲気が違う。入口では、手作りの品々を並べて入場者に「おみやげにどうですか」と声がかかり、明るい。「モウモウ」と言いながら、農機具の展示品のそばへ駆け出す勇太に誘われるようにして、1 階の展示を見て回る。屋外では原始時代にタイムスリップしたかの、手作り土器を釜にして、薪をくべての縄文汁づくり。「もう最後ですよ」の声に一杯 50 円で賞味する。雨模様で肌寒の体に、うれしいぬくもりが伝わってきた。（略）2 階のテーブルには、他市町村からの寄贈品などを始めとした館所蔵の貴重な文献が、自由に手にすることも出来るように並べられていたが、残念ながら素通りという状況となってしまった。しかし、こんな家族連れが気軽に資料館の中を歩けたのも「まつり」ならではないだろうか。』

入場者は 129 人と記録されている。この企画は大成功だったという声があるが、その後「資料館まつり」は一度も開かれていない。

「資料館まつり」が行われたことをＰＲするためのその写真展が 11 月 26 日（火）から 30 日（土）まで市役所本庁舎 2 階ロビーで開かれた。この写真展は、その後も同じ場所で平成 22 年まで、年度末に、その年の活動する会の事業報告を兼ねて続いていた。

一年間の活動を振り返る

活動する会の組織はまだできていないものの、平成 3 年度は以上のように資料館と市民とで行う催しが行われた。そして年度末には、一年間を振り返るための集会が 2 月 1 日（土）と同月 22 日（土）に行われた。前者は市民 13 人と社会教育課から課長、庶務係長、資料館から 2 名が出席している。この頃教育委員会が博物館建設について検討を始めていたことから、この日は、博物館を望むという意見と、「文化資料館まつり」の効果を評価する意見が多く記録されている。その外の主な意見は次のようなものである。

1　（活動の目的は）資料館を知らない人に知って貰う、資料館を利用している人たちの連帯といわれたが、どちらが目的だろうか。曖昧なまま出発したのではないか。また、資料館職員の取り組みが伝わってこない。仕事としているのか、仕事とは別物と考えているのか。市民も職員もやらされていると思って取り組んでいるのでは長続きしないだろう。

2　この活性化運動は自分たちで勉強したいことを行っていく会合を作りたかった。ボランティアで、市民の生涯学習につながるようなことをお金がなくてもできることに取り組もうと考えた。とにかく片っ端からやってみようと一年間やってきた。この活動を、市民の会を作って、そこでやってもらいたいではクール過ぎる。ボランティアの人材をどうやって集めるかに心を配って貰いたい。職員は上手にボランティアを動かしていくことが大切だ。

3　この活性化活動はボランティアで行われているが、何かを行うには資金が必要だ。いつまでもボランティアではすまないだろう。
4　活性化活動を一年間やってきてそれなりの成果はあった。資料館のＰＲにはなった。今後も続けていけば知名度はあがるだろう。
5　活性化活動では職員がよく人を動かしたと思う。今年を踏まえて次に移りたい。参加した個々のグループの相互理解ができたと思う。点から線につながった。ＰＲが少ないということについては社会教育課として広報課と交渉を望む。事業の資金に関しては文化資料館で使える予算の枠を増やしたらどうか。枠としてもらったらどうか。「まつり」の後の写真展は社会教育課長、庶務係長のご協力で成功したと思う。ＰＲ効果があった。
6　より多くの市民に来て貰ったので資料館のＰＲ効果はあったと思う。とにかく一年間やってきて筋道だったものが少しは出てきたと思う。あまり無理しない方が続けていけると思う。やってきて楽しかったと思える方がいい。資金に関しては行うための予算を取ってそのお金のためにやるというのはいやです。資料館のお金の中から使える範囲の中から行うというのがよい。場所は小出の方で行うこともいいと思う。
7（資料館から）市民講師との打ち合わせに、市民スタッフも参加するような、もっと資料館と市民が協同して進める方法を考えたい。資料館まつりは世話人会ができてそこと協議しながら進めることができた。このような形が理想だと思う。
8（庶務係長から）資料館が開館20年目にしてなぜ今、活性化なのかと思ってきた。一年たってそれが分かった。待っていてもお客さんは来ない。人と人のつながりは大切だ。点と点が結ばれて線になっているように感じた。
9（社会教育課長から）茅ヶ崎市にとって博物館はまだまだ先だという考え方がある。博物館といっても理解されていない面がある。そこでまず資料館を知って貰うことから始めて博物館に結びつけていく。今はこの資料館の活動を活発にしたい。文化資料館は文化財の収蔵施設として出発した。それが動のための施設として転機を迎えている。
10　活性化は何年もやるものではない。資料館まつりは公民館まつりとは別の色でやろうとした。Ｔさんは両方みられてどうでしたか。
11（Ｔさんから）資料館まつりは何か物足りないと思った。公民館には地域の幾つものサークルの協力がある。パワーがある。資料館まつりは、資料館を利用している人たちの手伝いで行われている。その差が出ていると思った。資料館の中でモノを販売していいかと聞かれて困った。公民館まつりで販売があっても不自然ではない。（モノの販売については教育委員会事務局で検討して見解を述べることになった。）
12（社会教育課長から）文化資料館は文化財の調査、収集、展示を目的としていて、活動（社会教育活動）はその目的に入っていない。しかし、考え方は時代によって変わるものでもあるし。

ＰＲや予算に関する課題があるが、次年度にも続けようという意気込みがあることが分かる。また、考えさせられる意見は3と11である。3はこの活性化活動が何ら行政からの支持もないボランティア活動であることの脆弱性をついたものである。今考えれば、活動はその後も同じようなスタイルで20年間続いている

のだが、この時点では、事態はどのように推移するか分からないのである。このような市民の善意にもとづくボランティア活動に対して、行政がとるべき対応というものはどのようなものだろうかを考えるための素材となると思う。11の意見は公民館まつりと文化資料館のそれとの違いを的確に指摘したものである。資料館の「まつり」の2回目が実施できていないことの理由をも物語っていると思う。

次に22日の打ち合わせは、市民12人と庶務係長、資料館職員3人が出席した。内容は次のように記録されている。

まず、教育委員会の検討を待つとなっていた資料館でのモノの販売については「活性化活動に利益を還元するという限りにおいてバザー行為は認めてもよいという教育委員会の見解」と報告があった。

次いで文化資料館から「活性化活動は次年度も行っていきたい。今年度を振り返ったとき、活動の形（活動の主体）が不明確だったことが問題点の一つとしてあげられているので、まずこの点を解決したい。資料館として望むことは、この活動を市民と文化資料館との共催にしたい。ついては市民のほうに組織を作って貰いたい。なぜなら市民側が個人個人では共催という形がとれない。共催という形の中で立案→準備→実施と進めたい」と提案している。このことについては、次のようにまとまった。

・個々の企画ごとに組織（プロジェクト）を作る。プロジェクトごとに資料館と共催して活動を進める。

・個々のプロジェクトの活動状況を確認する場（全体会と呼ばれた）が必要。

・次回集会（2月29日）に次の懸案を検討する。

1　この活動の中で4年度に各自が行いたいことを出し合う。

2　その行う日程を相談する。

3　各自はその中のどれかを担当する。

また、資料館から「文化資料館の活性化を行ってくださるのは大変ありがたいが、活性化という言葉では、今までの資料館の活動が0だったというふうにも解されて、資料館の心境は複雑なものがある。それより、新しい事業を開拓していくという方向の方がよい。活性化という言葉はもう使って欲しくない」ということが述べられ、参加者から「資料館の活性化は活動の結果に生じるもので目的ではないだろう。」、『「資料館の活性化」ということで集まっている人もいるだろうから変更しない方がいい』という意見があった。

「文化資料館と活動する会」の誕生

3年度中にさらに二回の集まりがもたれた。この2月29日（土）と3月28日（土）の集まりで、新年度の事業計画を検討された。29日は市民13人（広報紙上で一般に呼びかけて集まった人々）、庶務係長、資料館3人と嘱託職員1人が参加した。平成4年度に行いたい事柄が12件提案され、それを分担実行するプロジェクトチームが次のように4チームできた。

（1）講演会チーム（メンバー4人）　食べ物（野菜）の原産地に関する話、茅ヶ崎の大昔に関する話、堤在住のOさんに教育についての話を聞く、市民で何か勉強している人にその一端を話して貰う等々の素案を検討し企画化する。

（2）自然教室チーム（5人）　屋外にも出かける自然教室の実施

（3）民俗資料館を会場とするチーム（6人）民俗資料館旧和田家住宅を使って今は失われた昔の生活（昔話の語り聞かせ、

郷土食、年中行事再現、郷土芸能実演など）を行う。

（4）「まつり」チーム（民俗資料館を会場とするチームのメンバー＋1名）・「いま文化資料館がおもしろい」のような催しを行う。

各チームには資料館の職員が1名ずつ参加することとなった。さらに、事業はプロジェクトチーム毎に行うことになるから、チーム間の連絡のため年間数回の「全体会」を開く、「全体会」の通知はプロジェクトへ参加している人に対して行うこととなった。そして、次回の「全体会」を3月28日（土）に行う事とした。

28日の全体会は市民12人、庶務係長と資料館職員3人で行われた。前回の集まりで生まれた4チームは、それぞれ「市民講座部会」「自然部会」「民俗行事部会」と名称が決まり、新たに「考古部会」が設けられ、それぞれの部会に部会代表者が1名ずつ決まった。そして、部会毎に平成4年度の事業計画をつくることとなった。

次に全体会をどのように運営するかが検討され、①各部会の事業計画発表、②部会事業の調整、③事業終了後の反省、④問題点の解決、⑤行政からの説明を受けること、⑥会員相互のコミュニケーションを内容として、年間4回開催を原則とすることとなった。最後に会の名称が「文化資料館と活動する会」と決まった。会の代表者を立てることになったが、このときは決まらなかった。

ここに「文化資料館と活動する会」が誕生した。

（平成4年度以降の経過は、稿を改めて述べようと思う。2012.1.20）

*1 文化資料館と活動する会（民俗行事部会）